

氏 名 こうら うた
小浦 詩

学位の種類 博士 (医学)

学位記番号 富医薬博甲第 287 号

学位授与年月日 平成 31 年 3 月 26 日

学位授与の要件 富山大学学位規則第 3 条第 3 項該当

教育部名 富山大学大学院医学薬学教育部 博士課程
生命・臨床医学 専攻

学位論文題目

**Related factors of work-life balance and health effects:
the Japanese civil servants study**

(ワークライフバランスの関連要因と健康影響：日本公務員研究)

論文審査委員

(主査)	教授	稲寺 秀邦
(副査)	教授	服部 裕一
(副査)	教授	奥寺 敬
(副査)	教授	鈴木 道雄
(指導教員)	教授	関根 道和

論文内容の要旨

〔目的〕

ワークファミリーコンフリクト (WFC) とは、仕事役割と家庭役割の葛藤であり、仕事役割からの圧力と家庭役割からの圧力が矛盾するときに生じる葛藤と定義される。日本では2005年以降共働き世帯が増加し続けており、現在では専業主婦世帯よりも多くを占めている。また、日本は2015年で65歳以上の高齢者が26%以上を占めている世界一の高齢化社会である。合計特殊出生率は1.3~1.4と他国と比較して依然として低く、今後、少子高齢化の進行から労働力低下が予測されている。そこで、子育てや介護をしながら仕事を続けることができる社会をめざし、子育てや社会基盤の強化を推し進めようとしている。このような社会的な背景から、働く人たちの仕事と家庭の調和をもたらすことは、各個人にとっても、社会にとっても重要である。

これまでの研究で、WFCはストレス関連の健康問題との関連が明らかにされている。WFCは種々の健康問題と密接に関連しているため、職場・家庭・コミュニティにおいてWFCを軽減させるための対策を行うことは、労働者の健康管理において重要である。

WFCと仕事に関しては、休日勤務やシフト制、長時間労働などの特徴とWFCが高いことの関連が、これまでの研究で示されているが、これまで職種によるWFCの違いに言及する研究はなかった。また、WFCの性差に関しては、これまでの研究では様々な見解があり、まだはっきりとした結論はでない。

さらに、WFCと健康問題に関する横断研究はこれまで多くあるが、縦断研究はわずかであり、WFCの変化が与える影響に関する研究はまだない。

そこで、本研究では1) WFCの職種差、性差の有無を明らかにすること、それらの差異の関連因子を明らかにすること、2) WFCの持続した場合や、悪化した場合の、長期的な精神的健康・身体的健康への影響、さらにそれらの性差の有無を明らかにすることを、研究の目的とした。

〔方法並びに成績〕

研究1：仕事・家庭・個人の特徴はワークファミリーコンフリクト (WFC) の職種差・性差を説明する

対象者は日本公務員研究第2回の参加者。日本公務員研究は地方公務員を対象とした質問票による調査である。第2回は2003年に施行し、20-65歳の3035名を解析した。ロジスティック回帰分析を用いて、WFCの職種差・性差を明らかにし、それらの差異が何に起因するのかを調べた。

その結果、他の職種に比べて、専門職のWFCが有意に高かった（男性 オッズ比：1.29、女性 オッズ比：2.58）。男性では家庭因子を調整するとWFCの職種差は消失したが、女性では家庭因子・職場因子を調整しても有意差が残存した。男性に比べて女性のWFCが有意に高く（オッズ比：2.59）、職場因子を調整すると軽減した（オッズ比：1.68）。

研究2：ワークファミリーコンフリクト（WFC）の健康への影響：縦断研究

対象者は日本公務員研究第2回、第3回の参加者。第2回は2003年、第3回は2008年に施行し、20-65歳の1808名を本研究で解析した。ロジスティック回帰分析を用いて、WFCの変化と精神的身体的健康度、仕事満足感、主観的健康感との関連を調べた。

その結果、WFCが持続した場合とWFCが悪化した場合に、精神的健康度と仕事満足感が低下することが男女ともに明らかになった。男性は、WFCが持続した場合に精神的健康度が低下しやすく（オッズ比：2.65）、女性は、WFCが悪化した場合に精神的健康度が低下しやすかった（オッズ比：3.47）。

〔総括〕

WFCは、他の職種と比較して専門職において有意に高いことが明らかになった。さらに、WFCの職種差はシフトワーク、高い要求度、長時間労働などの仕事の特徴に主に起因することが示唆された。また、WFCの性差に関しても、仕事の特徴が主要な要因となっていることが明らかになった。いくつかの介入研究では、仕事と家庭に関する社会的支援の強化や支持的な組織文化が、WFCの軽減や労働者のストレス管理の改善に効果的であったとの報告があり、今後、日本においても専門職や女性労働者のストレスの多い仕事の特徴を理解し、高いWFCへの対策をとる必要がある。

また、高いWFCの持続や悪化は健康への影響があり、それらは男女で異なる傾向があることがわかった。WFCが健康の社会的決定因子として重要なファクターであることが示唆された。

本研究により、労働者の精神的・身体的健康問題の背景に存在するWFCへの介入の必要性が明らかになり、さらに職種や性別に着目することで、より効果的にWFCの低い職種へのサポートの必要性や職場環境の改善へ向けた取り組みの必要性が示唆された。

学位論文審査の要旨

【目的】

わが国では今後、少子高齢化が一段と進行し、労働力が低下することが予測されている。そのため、子育てや介護をしながら仕事を続けることができる社会をめざして社会基盤の強化を図る必要があり、働く人の仕事と家庭の調和をもたらすことが重要となる。

ワークライフバランスは、仕事、家庭生活、地域生活など、様々な活動について自ら希望するバランスで展開できる状態を言い、その出発となる概念としてWork-family conflict (WFC) がある。WFCは、仕事の役割からの圧力と家庭役割からの圧力とが矛盾する時に生じる葛藤と定義される。WFCはストレス関連の健康問題との関連が明らかにされており、職場、家庭においてWFCを軽減させる方策を講じることは、労働者の健康管理の観点からも重要である。これまで職種によるWFCの違いに言及する研究は少なく、WFCの性差に関しては一定の見解は得られていない。またWFCの変化が健康問題に与える縦断研究はほとんど行われていない。

そこで小浦詩さんは地方公務員を対象として 1.WFCの職種差、性差の有無を明らかにし、それらと関連する要因を明らかにすること、 2.WFCが持続した場合や、悪化した場合の 長期的な精神的健康・身体的健康への影響、さらにそれらの性差について明らかにすることを目的として本研究を行った。

【方法および結果】

研究1：WFCの職種差・性差についての検討

2003年に行った地方公務員を対象とした日本公務員研究の参加者を対象とした。20-60歳の 4,272名（回答率79.2%）のうち、すべての解析項目に回答のあった 3,053名（男性 2,071名、女性 982名）の結果を解析した。その結果、他の職種に比べて専門職のWFCが有意に高かった。男性では仕事因子や家庭因子を調整すると WFCの職種差は消失したが、女性では仕事因子・家庭因子を調整しても有意差が残存した。男性に比べて女性のWFCが有意に高く、仕事因子がWFCの性差に最も関連していた。

研究2：WFCの健康への影響（縦断研究）

対象は日本公務員研究第2回（2003年）、第3回（2008年）の参加者 1,808名（男性 1,258名、女性550名）である。ロジスティック回帰分析を用いて、WFCの変化と精神的・身体的健康度、仕事満足度、主観的健康感との関連を検討した。その結果、WFCが持続した場合と悪化した場合、男女ともに精神的健康度と仕事満足度が低下していた。男性では、WFCが持続した場合に精神的健康度が低下しやすく、女性では WFCが悪化した場合に精神的健康度が低下しやすかった。また女性は男性とは異なり、WFCと身体的健康度との関連を認めた。

【総括】

WFC は職種の中では、専門職において有意に高いことが明らかとなった。またWFCの職種差はシフトワーク、高い要求度、長時間労働などの仕事の特徴と関連することが示された。WFCの性差に関しては、仕事の特徴が主要な要因となっていることが明らかになった。

これまで行なわれた介入研究では、仕事と家庭に関する社会的支援の強化や支持的な組織文化が、WFCの軽減や労働者のストレス管理の改善に効果的であったことが報告されている。今後、専門職や女性労働者のストレスの多い仕事の特徴を理解して、対策をとる必要がある。高い WFCの持続や悪化は健康への影響があり、男性では WFCの持続が、女性では WFCの悪化が健康度に影響を及ぼす可能性があり、男女で異なる傾向が明らかとなった。

本研究により、労働者の精神的・身体的健康の背景に存在する WFCへの介入の必要性が示唆された。特に職種や性別に着目することにより、効果的にWFCの高い職種へのサポートを行うことが可能となるものと思われた。

本研究は地方公務員を対象として行われたものであり、結果をすべての労働者に一般化することは難しい。また同じ WFCや健康問題を抱えていた場合、男性よりも女性の方が離職などで調査から脱落していた可能性もある。このような限界はあるものの、本研究は、日本人の集団において専門職や女性労働者のWFCが悪く、健康への悪影響を及ぼしうることを示した点で新規性があり、今後の有効な対策をたてる上での基礎的データを提供した点で学術的重要性は高い。

以上より、本審査会は本論文を博士（医学）の学位に十分値すると判断した。